
魔法少女と遭遇してしまった場合

作戦参謀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女と遭遇してしまった場合

【Nコード】

N8741X

【作者名】

作戦参謀

【あらすじ】

東京都の人工浮島に存在する進学校 佐井学園に通う北野昴は、ある晩コンビニから寮へ帰ろうと全力疾走中に、なんと言葉使いの汚い厨二病的な少女と出会ってしまった。魔法だの儀式場だのという意味不明な単語の数々。そして、少女に出会ってしまった昴の運命とは……？ ちよつと変な力を持つ北野昴と、かなりイタイ魔法少女。そして2人を巻き込む騒動が今 始まる！

前編 魔法少女との出会い（前書き）

どうも、作戦参謀です！

元々短編の予定だったのに、短編じゃまとりませんでした……。

この物語は、同なろうで掲載中「魔法少女に会っちゃった場合」のスピンオフ的なものです。

初見の人でも大丈夫なようには書きましたが、「魔法少女に会っちゃった場合」本編を読むとより楽しめるかもしれません。

それでは、どうぞ！

前編 魔法少女との出会い

夜の東京は裏の顔を覗かせる。

多くの若者が外を出歩き、馬鹿騒ぎし、時には暴れることもある。

そんな夜の街を力のない者が歩くのは大変危険なことだ。俺こと

きたのすばる

北野昂は現在、身をもってそれを体験中である。

「うわあああああ！ く、くそっ！ エロ本買いにこういうと思っ
たらこのザマかよ！」

事の始まりはつい30分ほどまえ。今日の俺は大変ムラムラしており、いい加減新しいエッチ本が欲しいなという欲望に駆られていた。そんな欲望に負けてしまった俺は遂に、エロ本購入の為に夜のコンビニへ行くことにしたのだ。ネットのエロ画像とはまた違う新鮮さを求めて。

ところがその帰り、不幸なことに俺は親父狩りをしている不良達を見てしまった。

何故だかムカついた。

感情的になった俺は調子に乗って不良に絡み、仕事に励むおじさんを助けた……が、その代償として今度は俺が不良に絡まれてしまい、結局俺は8人の不良から逃げる羽目になったのだ。

「待てやテメエ！」

「お、るあ！ いつまでも逃げてんじゃねえぞ逃げ足王！」

「だが断る！ お宝本が滅茶苦茶になるくらいなら 俺は逃走を選ぶ！」

幸い、俺は中学の頃は陸上部に所属していた。最も、陸上部に入ったのは女子の体操服姿が見たかっただけであって、決して部内でもトップレベルだったわけではないけど……。

少なくとも、飲酒や喫煙で体を壊し、ペースを気にしない全力疾走をし、機能がまるでない服を着ている不良達よりは 体力と長距離のタイムには自信がある。

チラチラと後方を確認する、不良達は「もうダメだ……ッ」とか言いながら、次々と脱落していき残りはあと4人。アレさえ撒くことが出来れば 俺はエロ本を守れたことになる。

俺には逃げる事しかできない。

一般人である不良相手には、俺の能力は通用しない。

仮に通用するとしても、学外での能力使用は禁止だ。だから最良の選択として、俺は逃走コマンドをあえて選択したのである。そう、あえてね。

さらに2キロほど、汗と涙で走り続けて……後ろをチラッと確認する。

追っ手はいない。ふう……どうやら撒いたようだ。

「はあ、はあ、はあ……くそ、やっと撒いたか……でもエロ本は死守したよっ」

エロ本にしては久々の良作っぽいからね。なんとしても家に持ち帰り、新たな俺のムフコレクションとして追加したかった。それだけに、不良を撒いた時の喜びはいつもの2倍だよ。

「あゝら、面倒臭エことになっちまりましたわ」

刹那、ギクリと俺の背筋が氷ついた。

ここは俺が通っている学園の寮の近く。東京の巨大人工浮島メガフロートに建っている、俺の通う学園の学生寮の近くには公園がある。その公園

まで俺は逃げてきたのだ。

いつもに増して、不自然に暗い海浜公園。

俺の眼前、5メートル先に少女が一人立っている。緑色のワンピースを着ている、髪を左右の中央でまとめて、両肩にかかるくらいまで伸ばした金髪の少女だ。

外国人……かな、しかも珍しいことに右目が赤で左目が青のオッドアイだ。

だけど、それより気になるのはあの子……なんで剣を持っているんだろうか？

「な、なんだ……お前は誰なんだ……？」

見ているだけで震えてしまうような少女。別に洋口り美少女が目の前にいるからではない、少女の右手に握られている飾りが彫られた細身の剣。

俺はそれが不思議というか……怖いに決まってるじゃん。だって剣だよ。斬られたら普通の人間は死んじゃうじゃないか。

「別に誰でもいいつしよ。ただ……ちょっとクソツタレた事態が発生してね、アイリスはご機嫌斜めなのよ」

しかもなんて口の悪い子なんだ。やっぱりこの子は外国人、そして日本語を言葉使いの荒い人から習ったんだろう。じゃなかったら、普通ここまで口の悪い子にはならないと思う。

「ご機嫌斜めって……お前はここで何をしていたんだ？」

「答える必要はないわ。一応企業機密つーわけだしね」

「企業秘密って……どういうことだかさッパリだな」

「サッパリで結構。ねえ、アイリスの邪魔しないで欲しいな？」

「邪魔？ 俺の存在ってそんなに邪魔か？」

「うん、超ウゼエくらい邪魔だわ」

「ここは東京の公園だぜ、都民が利用して何が悪いんだよ」

「アイリス、日本語でカタギっていう無関係な人に手を出したくないの。だから、儀式場に一般人が入ってくるのって、マジム力つくというか許せねーのよ」

儀式場？

意味がわからん、まさかこの子は厨二病とでも言いたいのだろうか。まあ、一般人からしたら俺も十分厨二な能力を持つてるかもしれないが、流石に目の前の子程でもない。

というか、オッドアイの少女にだけは 厨二と言われたくないな。

「お前……何を企んでいるんだ？」

「だから知る必要はないわよ。それとも貴方 死んじやいたいわけ？」

死ぬって、剣を持つてるヤツに言われると洒落にならないな。どうしようか、やっぱりあれは剣という名の武器だし、一応この海浜公園は学園に近い場所でもある。とりあえず、放置しておけばお互い嫌な目に遭うかもしれないし、なんとかこの場所から退かせたいんだけど……。

ちょっと難しいかもしれないな。というか、本気で何を企んでいるんだあの子は？

「お前の目的は何だか知らないけどさ、やめといた方がいいんじゃないか？」

「あら、どういう意味？ 余程自信がないと吐けないセリフじゃないかしら？」

「別に自信はないけどよ、ここら辺 普通じゃない奴も多いからな」

「普通じゃない？ はん……じゃあアイリスが普通じゃない奴殺しちゃおうかしら？」

「お前なあ……どういう思考回路してるんだ？ 何で殺人に至るんだよ……」

「確かに、ここはアイリスみたいな特異点には危険な場所だって、隊長も先輩方も言っていたし、でもそこに敵が現れたから 超くだらねー儀式場まで作っちゃったのよ？」

特異点ってなんだよ、しかも隊長とか先輩とか意味不明な言葉のオンパレード。

本格的に厨二病なんだなこの子……どうしよう？

とりあえず、厨二病が好きそうな話題を振ったほうがいいのか？

「アイリスの目的は敵をとにかく殺すこと、学園に警戒しながら敵を殺すこと。必要があれば学園の生徒もブツ殺しちゃうの」

「何か怖い事言ってるし……つか、その学園って佐井学園の事か？」

耐えきれず、俺は学校の名前を少女に言っただけだった。
その瞬間、少女の眉がピクリと動く。

「……ねえ、どうしてその名前を知ってるの？」

「どうしてって、この制服を見て分らないか？俺は佐井学園の生徒なんだ」

俺のことを少女に教えた　まさにその瞬間の出来事。
言い終えたと同時に。

足音もなく、いきなり細身の剣を構えた少女が俺との距離を一瞬で詰める。腹を突き刺すように刃先を放ち、少女はニヤリと笑みを浮かべる……が、俺も無抵抗なわけではない。死ぬかもしれないという恐怖が体を動かし、殆ど反射的に少女の剣を回避する。

そこから体と視線を少女へ向け、万が一に備えて身構えた。

「お前、いきなり何するんだよ！」

「学園の生徒ってことはアイリス……いや、アルファ隊にとって超ウゼエ敵なのよね？」

「アルファ隊？　な、なに言ってるんだよお前……さっきから言葉が意味不明だぞ？」

「何を言っているのかしら？　貴方はアイリスを殺す為の刺客じゃねーの？」

「刺客って……お前、どういことなんだよ？」

「どういこと　　って、説明している場合じゃねーみたいだわ！」

少女はいきなり矛先を俺から、別な場所にいる誰かに変更する。

誰かは知らんが、その気配は俺にもビリビリと伝わってきて、少女に遅れること大体5秒。俺も少女と同じ、右方向へ首を向けて気配の正体を目撃しようとする。

「しかし、アルファ隊の魔法少女ともあろう者が、一般人を儀式場へ招き入れるとは……とんだ失策だとは思わないのか？」

突然、男の声が響いた。

眼前に人影が現れる。それは多分、俺らと同年くらいの男の声。黒髪だが、どうやら肌の色からして白人らしい。細身ながら筋肉質で引き締まっており、服装は体格にぴったりフィットするサイズの鎧を装備し、額には鷲のタトゥーが刻まれている。

右手には木製の柄に、葉っぱの装飾がついた鋭い槍が握られている。

どこか奇怪な男であった。

「あら、貴方こそ私の儀式場へ侵入して　　命知らずにも程があるんじゃねーかしら？」

「そうか、しかし貴様はリスクを背負っている。その民間人を巻き込まないよう戦えるのか？」

「守る必要なんてないわ　　アイリスに他人を守りながら戦う器はねーのよ」

「ならばよろしい。貴様は俺の敵に相応しい　名は何だ？」

「アイリス・オースティンよ……けど、名乗る意味なんてあるのかしら？」

「無論、戦う前に互いの名を名乗るのは礼儀だろう。我が名はマウリッツ・エングルンド。それでは計画進行の為　貴様の首をここで貰うでしょう」

言葉と同時に、マウリッツと名乗る男は槍を構え、驚くほど速い速度でアイリスと名乗る少女との間合いを詰める。凄まじい速度でアイリスに迫るマウリッツは、構えた槍を突き出し、先端の刃を少女の華奢で脆い胴体へ突き刺そうとする。

アイリスは諦めず、細身の剣を横に構える。刃と刃が激突し合い、火花が散る。しかしアイリスはその衝撃を逆に利用し、戦槍を軽く受け流した。

「莫迦^{ばか}ね」

呟きながら、アイリスは素早くマウリッツの背後へ回り込み、

「貴方^{あなた}如きが、私の豊穰神^{とんがみ}の剣を破ることは不可能だわ」

言いながら、稲妻の如く豊穰神の剣……という名前らしい細身の剣を振り下ろす。どう考えたってかわせるタイミングではないだろう。ところがマウリッツも常人ではない。

「は、ア……ッ！」

柄を握り、槍を勢いよく大地に突き刺した。刃が地面に触れると

同時に、地面が砕けて大量の破片がアイリスを容赦なく襲う。至近距離からの攻撃にアイリスは完全には対処できず、勝利の剣を振りまわしながらも、その表情は苦悶に満ちていた。

ちよつと待て……槍を突いただけで地面が砕けるって、普通じゃないだろアレ？

「しかし、極力魔術を行使しないのは貴様の流派なのか？」

「お莫迦^{ばか}な事を言うわね。アイリスはもう魔法を使ってるのよね？」

「単^{ひたえ}に魔法少女と言っても、種類は様々というわけか」

「最も、貴方のようなクソ野郎には　アイリスの魔法は見抜けないわね」

さっきから魔術だの魔法だの。どっちも一緒だろ……ていうかアイツら、最初に出会った時から思っていたけど普通じゃないな。とりあえず凄まじい能力の使い手だとは理解した。

「どうかな？　それは　やってみなくてはわからないだろう」

その言葉と同時に、アイリスとマウリッツは同時に前へ突き進む、それぞれの武器を構えて互いの距離を縮めようとする。それは1秒にも満たない時間。たったそれだけの、僅かな時間で5メートルは離れていた互いの距離が、なんと殆ど0にまで近づいた。

「ミステイルティン、防げるものなら防ぐが良い！」

挑発するようにマウリッツは言う。しかしタイミング的に、既にアイリスは防御の体勢をとっていたので、多分彼女の腕前であれば

マウリッツの槍を防げる……ハズだ。

そう、ハズだった。

ところが、マウリッツがミスティルティンと言っていた槍が剣に触れた、

「あ、あ……ッ!？」

刹那、豊穰神の剣は粉々に砕かれてしまった。

驚きを隠せないアイリスは、目と口を大きく開いたままその場に固まっている。その隙を突いて今度こそ串刺しにしようと、マウリッツが剣を砕いたミスティルティンを突く。

対して、丸腰になったアイリスに、槍へ対抗する手段は残されていない。

そのような状況で戦闘を継続するのは、多分余程の馬鹿だけだろう。そこで、彼女は勢いよく右足で地面を蹴って、咄嗟に右へ跳躍する事によってミスティルティンを避けた。

そこから彼女はマウリッツとの距離をとり、5メートルの所で彼を鋭く睨んだ。

「その槍……ヤドリギが変化したクソツタレたものかしら？」

「鋭いな、バルドルを貫き殺した槍なのだ。コイツは何でも貫く防御は不可能だぞ」

「ルーンを刻み、槍に魔力を注入した魔装具……へえ、猿並の莫迦^{はか}にしては上出来だわ」

「しかし、貴様は俺の攻撃で武器を失った。それは今の状況を理解した上での発言か？」

マウリッツの言う通りだ。アイリスって少女は今の攻撃で武器を失い丸腰。そんな状態で槍を持ち魔法という意味不明な力を使う闘士に、勝てるハズがない…… ンだけど。

何故か。

わからないけど 彼女の瞳からは炎が消えていなかった。

「お莫迦^{ばか}のクソ野郎。アイリスの本命^{ほんめい}は今の剣じゃないのよ？」

「ほう、どういう意味だ？」

「今の豊穰神の剣は、あくまで複製^{レプリカ}術式で生み出した即席のクソみてえな劣化版よ。そもそも、最初から手の内を見せるクソツタレがこの世にいると思うかしら？」

「そうか…… しかし貴様は今すぐ手の内を見せる事になる」

「そうはいかないわ。貴方の魔法の弱点 もう見切っちまったのよ？」

アイリスが言いきった瞬間 アイリスの右手に新たな物体が出現し、握られた。

あの形は…… どう見ても鹿の角だよな。

あれじゃあ、槍使いと戦ってマトモに勝てるとは思えないぞ？

「しかし、奇抜な武器を使うな…… 貴様は」

「鹿の角は北欧神話の神、フレイがスルトとの決戦で用いた立派な武器よ。フレイはスルトに負けたけど クソツタレなクレイジー野郎^{フアック}をぶつ殺する程度なら十分よ」

「奇抜だな……アルファ隊の癖にこつちの世界の術式を行使するとは」

「色々事情があるのよ。あまり気にしないで欲しいわね」

こつちの世界がなんだとか言っているが。俺にはもう理解不能である。

あとアイリス……お前のその汚い口調はアメリカ式かよ。今気付いたけど、アイリスの下品な言葉の数々は、アメリカ人がよく言うてる下品なスラングばかりじゃないか。

それにしてもこの状況……。

「これで……いいのか？」

自問する。

どっちが善悪かは知らないけど、個人的にはマウリッツのほうがムカつく。あんな小学生か中学生かも見分けのつかないくらい女の子に、武器を向けるだなんてな。それはもう、女の子大好きムフ大好きな俺としては、あのマウリッツって男は大罪を犯したと思う。

武器持って女の子を襲う時点で、俺の中では万死に値するぜ？
大体、こんな光景を見てしまった以上、俺も無関係ではないだろう。アイリスも佐井学園には何かがあるとか言ってるやがったしな。それも気になるし、だから本人から聞いてみよう。

その為にはまず、マウリッツをぶっ倒す必要がある。

「魔法だか魔術だか知らねえけど……アレは物質なんだよな？」

さらに自問する。

魔法だか魔術だか知らないが、果たしてそれは物質であるのか。

そして、魔法だか魔術だかに関係のあるあの槍に　俺の能力が通用するのだろうか。

まあ……考えた所で仕方がない。まずは　試してみるしかないよな！

「事情か……まあ知らんが、その鹿の角も無力であると教えよう」

「大した莫迦^{ばか}ね。いいわ　アイリスも貴方の弱点を教えてあげようかしら」

俺の眼前で言い合いを終えた2人は、それぞれの武器を構えて再び飛びかかる。そのタイミングに合わせて俺も一気に、この足で大地を思いっきり踏んで、

「お。オオオオオオああああああああああああああああああああッ！」

俊足の2人を恐れず、躊躇せず、ひたすら叫びながら2人に近付いた。いや、正確に言えばマウリッツの眼前。アイリスの盾になるように　俺は2人の間で立ち止まる。

「　なっ！　ば、莫迦^{ばか}野郎！　早くそこを退きなさい！」

アイリスは俺の背後で動きを止めたが、マウリッツはそのまま突っ込んでくる。おそらく標的をアイリスから俺に変更しただけなのだろう。俺には彼女の警告もちゃんと聞こえていた。

確かにアイツの槍を喰らえば、普通の人間なら死んでしまうだろう。

そう、普通の人間ならな。

マウリッツは胸元を狙っている。丁度、俺が首から提げているネ

ツクレスの、白銀に輝く本隊付近を狙うかのように。それは偶然か、それともわざとか。どちらにしてもそこは胸元で、槍で突かれれば心臓を貫かれ、簡単に死んでしまうであろう。

それでも、俺はアイリスの警告に従わず　　槍を避けようともしない。

ただ、ぐわん、と右腕を勢いよく伸ばして

「ぐ……ッ!？」

咄嗟に柄を握り締める。

それでも槍は突き進もうとする。力は俺の腕にも伝わり、手首に激しい痛みを感じた。

だが、そんな無理をしてまで槍に触れた　　僅か1秒以内の出来事。

「な……………ッ!？」

「　　ッ!？」

槍が、マウリッツの槍に触れた瞬間　　七色に砕けて飛び散ったのだ。

その不思議な現象にアイリスもマウリッツも驚愕する。俺自身、よくわからねえけどこれはそういう能力なんだ。触れた物の物質を解析、操作し、元素……いや、物質を構成する最少の単位である素粒子ごと破壊し、対象物を全く異形の七色の物体に変えて砕く。

マターコラプス
物質崩壊。

それが物質であれば、素粒子を破壊し物質を崩壊させる俺の能力だ。

理論上、暗黒物質も崩壊させられると思うが……試した事はないぜ。

ダークマター
暗黒物質なんて、誰も見たことがないからな。

「馬鹿な、俺のミスティルティンが……？」

「そうだよな……所詮、槍だつて物質で構成されてるんだよな」

「貴様……まさか、魔術師か！？」

「魔術師？ 知らねえよ……俺は佐井学園の学生で 超能力者だ
よ」

超能力。

魔術だか魔法だか知らないが、多分それと似たようなものである。普通の人間には不可能なことを可能にする特殊な力、それが超能力というものなんだ。

これ、使いこなすの大変なんだぞ。いちいち脳内で計算しなきゃいけないからな。

「く、クソ ツ！」

マウリッツは慌てて腰に提げている、サバイバルナイフを手に取り
ろうとする。

だけど、そんな物騒な道具を持たせるほど 俺も甘くはない。
なにより、ナイフを取ろうとするその動作が 大きな隙なんだ
よ。

「おつ、せエ ツ！」

あまりにも隙だらけだった不思議な男、マウリッツ。俺はその隙
を突くように、岩のように固く握り締めた五本の指を、目の前のク

ソ野郎を叩き潰すべく 己の最大の力で放つ。

ゴン！ という壮絶な音が炸裂した。

一旦宙に浮いたマウリッツのは、激しく背中から地面へ落ちる。

殴打で脳を揺さぶられた上に背中を強打した彼は、地面へ転がると

そこからマウリッツが動くことはなかった。

気絶したんだろう。倒れる男を見下ろし、俺は一言、

「心配するな、俺の物質崩壊は制御できるから 命は奪わねえよ」

終わった。

エロ本を買いに行っただけなのに、どうしてこんな事に巻き込まれたのだろう。本気でそんなことを想いながら、伸びているマウリッツを見下ろし考えていた。

前編 魔法少女との出会い（後書き）

次回予告：

いよいよアイリスの正体と、複雑な事情が明らかに……？
そして、物語のクライマックスは！？

まだ続きます。

後編 遭遇の結果

佐井学園は全寮制の高校であり、全校生徒1000人を超える学校なだけに、南部の学生寮エリアの面積もかなりのものだ。生徒は自分の寮が何番寮で、その何番寮がどこにあるのか。さらに何番寮の第何号室かを記憶していなければ、帰ることすら不可能という地獄のような場所である。

しかも、寮のランクというのも、能力者のランクに応じるものであり、例えば最高位のAランクになれば立派なホテルのような部屋が当たるし、最下位のEランクは昭和の官舎レベル。

それぞ本物の格差社会。

ただし、この学園の場合は財力ではなく 能力値で全てが決まるのだ。

俺は地味な能力の持ち主ながら、その強度故にCランク能力者で、いわゆるやや強力な能力を扱えるというレベルの超能力者だ。故に寮の質はそれほど悪いわけでもなく、かといってそれほど高級な部屋が当たるわけでもなく、その為俺の部屋は一般住宅クラスだ。

まあ……生活には何の不便もない。

ちなみに聞いた話によると、中には特例で上位能力者と一緒に生活する下位能力者が少数ながら存在しているらしい。多分、互いの相方がよっぽど好きなリア充なのだろう。

さらに当然、こういう学生寮は男女に分かれている。故に、俺のような男子が女子を部屋に連れ込む機会なんて滅多にないわけだ。精々一部のリア充くらいだろう。

それなのに俺、今日になって初めて 女の子を部屋に連れ込むじゃいました。

「むう……………」

厨二病魔法少女、彼女は確かアイリス・オースティンって名乗っていたな。そんな彼女は俺の部屋に入った瞬間椅子に座り、気難しそうな表情を浮かべ、俺の部屋をジロジロ見回す。

女の子にお部屋観察されるのって、予想以上に恥ずかしいな……。

「おせエわね、食事はまだなの？」

「お前は客の癖に我慢を知らないのか？」

「アイリスは聞いたの。日本の飲食店は最初からご飯が回っているものだって」

「回転寿司かよ……いいか、普通の家にそんな設備はないからな」

「そんな！？ アイリスの祖国と同じじゃないのっ！？」

「はあ……お前、どこから来たんだよ？」

「アイリス？ アイリスはレムリアって所から来たんですけど？」

「レムリア？ バルカン半島にそんな地名あったか？」

「違う、レムリアは異世界よ」

何を言っただか、と思ったけど負けてはダメだ北野昴。コイツは自称魔法少女、知らない世界を脳内に思い浮かべるなんて造作もないことだろう。とりあえずスルーだ、ここはスルーして紳士的に料理を差し出すべきだと、俺は本能的に思ったよ。

「ほら、飯出来たぞ」

俺はテーブルに白い炊き立てご飯入りの茶碗と、焼いた秋刀魚が載った縦長の皿、大根の煮物を入れた皿に、豆腐とわかめの味噌汁が入っているお椀を置く。

アイリスは匂いを嗅ぎ、お箸でつんと秋刀魚を突いている。
知らない国の料理に興味があるみたいだな……だけどお行儀は悪いぞ。

「これは……うまいのかしら？」

「外国人から見たら特殊かもしれないけど、秋刀魚は焼くと本当にうまいんだぞ。その白いお米だって新潟産のコシヒカリ。大根もわかめも豆腐も、態々国産のものを選んだからな」

俺は月末は節約の為に外国産のものも食べるけど、基本的に一ヶ月の生活資金が学園側から支給された直後は、こういった国産のものを選んで食べているのだ。

頑張れ日本の農民漁民畜産家、俺は極力国産の食い物食うよ。

「……………」

「大丈夫だって、うまいから食ってみろ」

「……………うんっ」

若干警戒しつつ、アイリスはサンマを箸で摘む。おお、見ているだけでうまそうだ、だけどアイリスがご飯を食べる姿はなんかその……萌えるし、ご飯もいいけどアイリスもいいよね。

「……っ……ッ！」

秋刀魚を口の中に入れた瞬間、アイリスの瞳が一際輝き始めた。

「おいしいわね、生贄の味も悪くないわ」

「いや、それ生贄じゃないから……」

「うん、処女の生き血も悪くないわ」

「それは味噌汁なんだけど？」

やっぱりアイスリは相当の厨二病だな。味噌汁を処女の生き血なんて表現する人、生まれて初めて見たかもしれないよ。ていうか、今後もアイリス以外には見ないだろうな。まっ、アイリスのお口に和食が合って本当によかったよ。

こんなの食えるか？なんて、ちやぶ台返しみたいな事されなくて本当に良かった。

さて、俺も食べるか？……うん、炊き立てご飯は最高にいいいな。

「で、食いながらで悪いんだけど、アイリス……だっけ？」

「そうよ、そういえば変態の名前はなんだったっけ？」

「変態って俺かよ、お前に何かやったか？」

「……魔法使いの魔法を掻き消すその腕、普通じゃないわよね？」

「ああ、この腕か？ 別に腕以外でも出来るんだけど、右腕が一番

精度高いからな」

「ふ〜ん……やっぱり超ウゼエ変態さんだわ」

酷評かよ……まあいい、誰だって触れたら七色に砕くような右腕見たら、気持ち悪がるに決まってるだろうし、それが一般人の反応だろう。

あ、でもアイリスも一般人じゃないか……とりあえず、自己紹介はしておこう。

「まあいいや……俺は北野昴、さっきのアレは超能力だ」

「超能力？ 話には聞いたことがあるわ……魔法のコピーでしょ？」

「あのなあ、俺も詳しい事は知らないけど、超能力ってのは一応ここでは科学的根拠に基づき、豊かな想像力と高い演算能力が必要で、想像通りに脳で計算処理を行って初めて発動できるものなんだ。魔法だか魔術だか知らないけど、非科学的なものとは全くの別物なんだぞ」

そう、それがこの学園で言う超能力というものである。ただし、中には佐井学園での超能力開発を受けなくても、自然に超能力を持つ希少な存在もいるらしい。まあ、俺を含めて学園に在籍する殆どの超能力者は、ここでの能力開発を受けて力が発現した者である。その大半は科学的根拠に基づいたもの 故に魔法なんてものは信じられないんだよ。

「ふ〜ん、昴は超能力者なのね」

「まあ、一応な」

地味な能力だから、日の光を浴びる日なんて永遠に訪れないだろうが……。

「それで昴、何の話だったっけ？」

「ああ、そうだ。結局レムリアって何処にあるわけ？　つーか、なんでお前はさっきのヤツに襲われていたんだよ」

「……そうね、関わっちまった以上　昴だって無関係じゃないわよね」

「お、おう」

とんだか嫌な予感しかしないけど、気になることは気になるし……人間、知る権利っていうものがあると思うんだ。だから俺はアイリスの事情を知ってやろうと思っている。

たとえそれが、どんな事であろうがな……。

まっ、俺だって超能力を扱える以上、世間の異端児である。アイリスやさっきの男も異能の力を使っていたけど、俺だって異能の力を使うことが出来るんだ。

多少、ぶっ飛んだ話だとしてもそうは驚かないだろう。

やがて、口ごもっていたアイリスはオッドアイの目を開けて、

「まずは、レムリアの話をしようかしら？」

「レムリアか、お前が異世界とか言っていたけどさ、それって本当の話か？」

「本当よ。世界は確認されているだけでも3つ存在しちまってるの。」

一つはこの世界、二つ目は魔族達の地下世界“アルファレド”。そして三つ目はアイリス達の世界　レムリア」

全く意味不明である……けど、一応それが事実だと仮定しておいてやる。アイリスは割と真面目に話を進めているからな。ここで俺が突っ込んで話が進まないだろうし。

「レムリアはこっちよりも科学技術が進んでいて、なおかつ魔法の存在も当たり前」

「どこのRPG世界だよ……で、さっきの男はなんなんだ？」

「サヴィエトってクソツタレ共よ」

「サヴィエト？　なんだそれ、ソ連じゃあるまいし……」

「ああ、レムリアってパラレルワールドみたいなモンなのよ。多分、そのソ連って国がクソツタレサヴィエトに対応する国家だと思うわ」

「パラレルワールドって……」

その時点で既に意味不明である。

まず、パラレルワールドが本当に存在する時点で信じられない。

予想の斜め上を行くな……アイリスの話は。色々とぶっ飛んでやるぞ。

「それで、サヴィエトっていうのは約100年前に革命で当時の帝国が崩壊し、生まれた国家で、そのサヴィエトは数十年後アメリカ合衆国と冷戦を始めたのよ。国民の生活は圧政と年々財政難になっていくせいで最悪……でも、大体20年前にサヴィエトは革命で倒

れ、指導者だった女は魔法使い達に封印されたわ。国名もロジーナ連邦に変えて、国民の生活は大分改善されたハズだったのだけど、何者かがその封印を解きやがっちまって、サヴィエトの指導者が何らかの手段を使ってこっちの世界に紛れこんじまったわけよ」

ホントだ、この歴史……殆どこっちの近現代史と同じじゃないか。魔法とか、そういうのが絡んでくる以外は殆ど同じ。これがパラルワールドってヤツなのか。

だけど、何故だ？

その指導者はこの世界のいるハズなのに……だけど何故？

「ちょっと待て、その指導者ってこっちにいるんだろ？ だけど何も起こってないぞ？」

「既に起こっちまってるわよ？ 例えば、その指導者はこっちの世界でサヴィエト亡命政府を樹立、かつての部下を率いて、さらにこっちの世界の人間をコントロールしちまってるの。例えば同じ思想を持つ者とか、この世界では行き場のねえ魔法使いって存在をね。そんな彼らが集まって、編成されたのがサヴィエト亡命政府の軍隊

赤軍よ」

つまり、さっきの男は赤軍の兵隊でもあるってわけなのか……？

人々をコントロールする？

行き場のない魔法使い？

ちつくしょう……サッパリわからん、どうしてそんな事になってるんだよ。

「結局、サヴィエトの目的ってなんだよ？ それ以外に何か大事件を起こしたのか？」

「サヴィエトの目的はロジーナ現政権の打倒……と、かつての帝政ロジーナに君臨していた皇帝一族の子孫　　ふじまけいすけ 藤島圭介の身柄拘束よ」

「藤島圭介？　ネットで見たことあるような……もしかして」

「そう、先日の8・17事件は彼と古宇坂市を狙って、サヴィエト禁断の暗部組織“赤の軍神”が動きやがって、藤島様達と風剣のシルフって魔法使いとの戦いのことよ」

「おいおい、こりや大事だな……つか、藤島圭介ってのも普通じゃないな。魔法使いと戦って勝ってしまうんだから、俺と同じ超能力者か　あるいは魔法使いって存在だろう。」

「超能力者だった場合は、この学園の生徒でもないし……多分自然に超能力を持っている天然素材ナチュラルマテリアルと呼ばれるタイプの超能力者であるう。」

「確か、世界に50人しかいないらしい。そのうち7人は日本人らしいが……。」

「けどちょっと待てよ、皇族の子孫って事は……？」

「なあ、その藤島圭介って日本人じゃないのか？」

「いいえ、日本人よ。ただご先祖様がアレクサンドル様なだけ。日本人の血のほうが濃くて、見た目も普通の日本人らしいわ。ま、体質は先祖がえりしちまつてるらしいけど」

「藤島圭介ってのは日本人なのか……不思議だな。」

「何時から日本人になったんだろうか？」

「まっ、気にしてもしようがない……それより気になる事があるし。」

「じゃあ、古宇坂って街を狙って理由ってなんだ？　そいつらの目

的はあくまでロジーナ現政権の打倒と、藤島圭介ってヤツの身柄拘束なんだろう？」

「そのハズなんだけど……対ロジーナ戦に備えて連中、領土が欲しいらしいのよ」

「りよ、領土って……まさか」

「そのまさか、連中は日本の国土を占領しようとしているらしいわ」

おいおい、それって結構まずいことじゃないかよ。俺らまでサヴィエトの一員にされたら生活はどうなっちゃうんだ。いや、それ以前に俺達超能力者の扱いはどうなるんだ？

魔法なんてものに触れたら 超能力者はどんな反応をするのだろうか？

「それじゃあ、アイリスは何者……？」

「アイリスはサヴィエト打倒、及び関係者の拘束を任務とする特殊部隊 アルファ隊の一員。しかもアイリスは部隊に10人もいない特殊隊員よ？ 並の魔法使いには負ける気しないわね」

「そ、そうか……」

随分自信があるなコイツ……さっき攻撃されそうになっていたのに。まあ、別になんだったっていいんだけどさ、それにしてもアイリスが特殊部隊の一員だったとは。

あまりにも、意外過ぎる事実だな……というか、本当に事実なのかこれは？

身の周りが科学だらけの俺には ちよつと理解するのが難しい

ぞ。

「じゃ、じゃあ最後の質問だけど……さっきのアイツはどうなったんだ？」

「ああ、あのクソツタレなら仲間が回収したハズだわ」

「お前は、これからどうするんだ？」

「アイリス？ ああ、次の標的潰しに行くわ。それに、アイリス達魔法使いつて生き物は、この学園にとっては研究材料らしいから長居は禁物なのよね」

そうか……そういえば、前にどこかでこんな噂を聞いたことがある。

5本指の序列第1位が学園から姿を消したと同時に 当時、どこかの街で頻繁に発生していた連続殺人事件が完全に消えた……という噂を。

仮に第1位が殺人犯だとして……もしかして、その第1位が殺していた奴らってというのは……？

「アイリス……本当に行くのか？」

「いつまでも世話になるわけにはいかねーでしょ？ アイリスにだって仕事はあるし、態々危険地帯で生活する気もねーわ。だから、アイリスはもう外に出ちゃうよ」

そうか……行っちゃまうのか。

もしも、アイリスの言っている事が全て本当だとしたら。
……ああもう、不安だ。なんなんだ、この妙な胸騒ぎは？

「じゃあ、せめて学園の出口までは送ってくよ」

「え、なんで？」

「アイリスは一応、現状じゃ侵入者扱いだからな。護衛の意味も含めて……な？」

アイリスは俺の提案を聞き、少しの間だけ黙りこんだのだが……やがて、アイリスは俯きながらも頬に朱色が浮かんでくる。

「め、飯までご馳走してもらって……悪いでしょ？」

「心配すんな、これくらい紳士なら当然だろ」

「……………わかったよ……………」

恥ずかしそうに小さくつぶやく。

それが許可の合図であった。

その後、アイリスを見送る為に夜の学園を2人で歩く。夜の学園は不気味かつ危険、学生は誰もいないが警備員は巡回している。なんでも、超能力開発という機密の漏洩を防ぐべく、武装した警備員が24時間体制で学園中をパトロールしているのだとか。

特に今年の春、序列第3位による犯行だったらしいけど、何か機密文書を盗み出そうと立ち入り禁止区域に侵入し、序列第2位の戦闘があつたという事件が発生している。機密文書は結局盗まれなかったわけだし、多分第2位が戦闘で勝利したのだろう。

だが、その事件以降　学園内の警備は以前に増して教科された

のだ。

だからこそ、俺たちは今　　コソ泥のようにコソコソと敷地内を移動しているのだ。

ところで、こんな時になんだけど……また、気になる事が頭に浮かんだ。

「なあ、そういえばアイリスって異世界人なのか？」

「えっ？」

「いや、異世界の特殊部隊にいるってことは、やっぱり異世界人なのかなって」

「……………」

何故だか黙りこむアイリス。

その表情は何故だか、悲嘆ひたんと寂寥感せきりょうかんに溢れていた。

ひょっとして、これは聞いたらいけない事だったのだろうか……？

「わ、悪い……聞いたらずい事……だったか？」

「……いや、別にそうでもないわ」

「えっ？　じゃ、じゃあ……………」

「うん、質問に答えちゃうわね……アイリス、元々はこっちの世界の人間よ？」

こっちの世界の人間ってことは……まさかコイツ、レムリア人ではないのか？

それはつまり　この世界のどこかの国に住んでいたってわけ……
だよな？

「この世界じゃ魔法使いは迫害される存在だわ。昴も一応知ってる……でしょ？」

「えっと、なんだっけ？　魔女狩りってのなら聞いたことはあるが……」

「そう、それよ。アイリスはね、元々スウェーデンに住んでいたんだけど……アイリスが魔法使いだって事がバレて、一家が教会に迫害されちゃったのよ……」

「……………ッ」

4万人の魔女や魔術師が処刑されたという魔女狩り。最も、処刑された人々はオカルト的な儀式に走っていた人もいれば、当時の常識を超えた考え方を持つ科学者達だったハズ。

現代じゃ、そんな馬鹿馬鹿しくて行われていない……いや、一応あるらしいが、一部では今だに私刑という形で魔女狩りが行われているらしい。

だけど、今更教会が魔女狩りを行うだなんて……そんな、本当なのかよ？

「唯一生き残ったアイリスは、居場所もなくて……毎日寒かったけど、でも……そこに今のリーリヤ隊長が現れて、それで　アイリスだけが居場所を発見し、生き永らえちゃったのよ」

「本当なのかよ……」

「ええ、事実よ……アイリスは、アイリスだけが生き残って……パパ、ママ……ッ」

あれほど強がっていたアイリスは、今では小さく震え、瞳からは雫を流している。つまり今までの威勢は全て　虚勢であったというわけか。

アイリス・オースティン。

最初は単なる厨二病で、その上オカルトマニアという痛い子だと思っていた。けど、そんな認識は俺の間違いであった。本当のアイリスは　ごく普通のか弱い女の子だ。

「……お前は、自分だけ生き残った事を罪だと思ってんのか？」

「……そうよ、だって……アイリスだけよ？　アイリスのせいでパパとママが死んで……2人を殺したアイリスだけ、今もここに生きてんのよ？　なんで殺人犯が生きなくちゃいけないのよ……っ」

彼女の言葉はひどく小さく、哀しい^{かな}。

ああもっ……見てられない。俺は思わずアイリスに近付き、頭にぽんっと手を置いた。

「別にさ、お前は悪くないと思う。うまい事は言えないけど、お前の魔法は元々使えたか、誰かの為に必死で覚えたものじゃなかったのか？」

「……最初は、それを見世物にして……お金を稼ごうと思ってたわよ。アイリス、貧乏で……パパとママも苦しんでいたから……っ」

「ほら、そんな目的があったんだ。最初から殺す気はなかったんだろ？」

「　　そんな！　でも、アイリスは　」

「確かに、お前は覚えたことによって、予想とは違う結果を招いたのかもしれない。だけど、それは全て親の為だったんだろ？　大切なものを守りたかったからなんだろう？　それにさ……お前の死なんて死んだ両親も、アルファ隊の仲間たちも　俺だって望んじやいないぞ」

何かを言いかけて止めるような、喉の引き攣りが聞こえた。全身から力が抜けたのか、だらんと手がぶら下がるのが見える。アイリスの声は僅かに震えていた。

「甘いわよ、昴……超、甘い……っ」

「それは昔からよく言われていた事だよ」

「昴の莫迦……阿呆、えっち」

「えっちだけは意味がわからないぞ」

まあ、変態であることには間違いないが。

なんたつて、エロ本買った帰りにアイリスと出会ったのだからな。けどまあ、別にいいか……どうせ変態だしなあ俺。

「まっ、とにかく自分をそう責めるな。そういうのは一番よくないと思うぞ」

「す、すばる……ッ」

アイリスは衝動的なのか、不意に俺に抱きついてこようとする。俺はそれを拒むつもりは無い。彼女を受け入れようと 両手を開いた、

「きーたのお？」

突然、後ろから聞こえた声。

アイリスは俺に抱きつく寸前で動作をやめ、俺と一緒に声が聞こえた方を向く。ここは佐井学園南門の近く、学生寮に割と近い広場のような場所。

その広場のほぼ中心部分に、少女が佇んでいる。

ベージュ色の若干派手なドレスを身に纏った、長い茶髪の少女だ。まるで、どこかのお嬢様のような清楚さを感じさせる少女は、次第に俺とアイリスに近づいてくる。

俺はソイツの顔に 見覚えがあった。

「さ、沢那……魅咲!？」

どうしてコイツが……なんで五本指の序列第四位の超能力者が現れた？

「アンタとは直接会ったわけじゃないけどね、一応珍しい能力の持ち主だから 私達のリストにも登録されてんだよね」

「私たちの……リスト？」

「おっと、いけないわね。心配しないで、一般学生は知る必要がないものだよ」

「お前……目的はなんだよ？」

「決まってるじゃん。ソレ、その特異点を私に頂戴よ」

「……そうか、お前の狙いはアイリスか」

それが分かった瞬間、俺はアイリスを庇う為に前に立ち、拳を構えて沢那を睨む。

俺の行動が気に入らなかったのか、沢那の表情がさらに怒りに満ちてゆく。

「なあにそれ？　もしかしてアンタ、私と殺し合いしちやいたいのカナ？」

佐井学園にたった5人しかない、Aランク能力者の脅し文句に気付いた時には既に恐怖で俺の身体が震えていた。それでも、俺はアイリスの前から退こうとはしない。沢那がアイリスを捕まえてどうするつもりかは知らないが、ここでアイリスを引き渡してはいけない気がした。

なんとなく、アイリスを守らなきゃいけないような気がした。彼女には　幸せになってもraitai。

多分、そんな想いのせいだろう。沢那と戦う覚悟を決めた理由つていうのは　。

「アイリス、逃げろ」

「えっ、ちょ……どういう意味かしら？」

「そのままの意味だ。初対面だけど分かる、沢那は強い　アイツ

は化け物だ」

「なっ？　そ、そんな……ヤバイヤツが相手ならアイリスだって戦うわ。昴、アイリスはアルファ隊でも10人しかない特隊員の一人。佐井学園の超能力者なんて敵じゃ」

「いいから逃げろ！　そんな常識が通用する相手じゃないんだ！」

そう、沢那魅咲は“アトムハウンド原子操作”という能力を有する化け物だ。

俺も詳しい事は知らないけど、なんでも原子操作を行い、ある物質を違う物質に作り替えたり分子運動を利用し、過熱や冷却を行い、電子を扱う都合上電気も多少扱える。そんな、怪物みたいな能力を持っているヤツだ。いくらアイリスだって　コイツに勝つのは難しい。

だけど、所詮物質を操る能力だ。

だったら、俺の物質崩壊なら……ッ！
マターコラープス

「……嫌よ、アイリスは　二度と誰かを見捨てて逃げたくなんかない！」

「アイリス、お前……っ」

「昴が戦うならアイリスも戦う。ご飯のお礼もしたいわ」

「お前……」

おいおい、そんなに強い目で俺を見るなよ……。
そこまで光に満ちた視線を向けられると、断ろうにも断れないじゃないか。

全く……魔法使いつてのは、我がままなヤツが多いモンだ。

まあ確かに、俺が沢那に勝てる保証はないからな……。

「……アイリス、俺の足引つ張るなよ」

「ふん、お莫迦^{ばか}ね。アイリスは戦闘のプロよ？ それに」

言いながら、アイリスは勢いよく左手を前へと伸ばし、

「アイリスは後方支援が得意なのよ」

開戦の合図とも言つべきセリフを放つと、アイリスはドレスの中から、見慣れない文字が刻まれたカードを二枚ずつ、地面へ投げ捨てていく。

しかし、良く見るとそのカードの配置には規則性があつた。

彼女を囲むように 不思議な文字が描かれたカードは六角形を形作っていたのだ。

「我が神々の中で、最も美しい眉目秀麗な豊穡^{もたら}の神。それは王家の始まりにして、国家に安泰と豊かさを齎^{もたら}した平和の象徴。それは実り豊かな恵まれし王にして、妖精たちの支配者。その役は平和、手段は絶対の勝利。顕現^{けんげん}せよ、この世に勝利と豊穡^{もたら}と平和を齎^{もたら}せ
ユングヴィの幻想^{サモン} ツー！」

それは突然にやってくる。

まずは地面が盛り上がり、彼女を囲むように複数の塚が完成する。その塚はやがて七色に輝いた後に目に見えなくなり、続いて眩い閃光が彼女のすぐ後ろを中心に周囲を包み込んだ。

夜なのに、太陽の日を受けている日中よりも明るい。まるで爆心地のように、真っ暗なハズのこのあたりが明るく輝いていた。あまりの眩しさに思わず目を閉じていた俺だが、ようやく光が収まって

視界も回復してきた所で、俺は目を開けてアイリスへ目を向けた。

「な、なんだ……これ!?」

信じられない物体……いや、生命体がアイリスの後ろで剣ツルギを構えていた。

それは長い金髪の大柄な男で、服装は単に布を腰に巻き、同じ布をマントのようにつけているだけの簡素なものだが、男が右手に持っている剣は両刃で刀身が長い。

例えるなら、ヴァイキングソードのような細剣であった。

さらに、光り輝く剣にはアイリスが巻いたカードと似たような文字が刻まれている。

「な、なんだよこの化け物は……私をナメてるのか?」

「化け物とは、我が主あるじに対する冒涇ぼうじやうね」

「ふん、オカルトなものは信じられねーな。私からしてみればソレは化け物だよ!」

「平伏しなさい愚民が。でないと、勝利の剣の錆になっちゃおうわよ?」

沢那とアイリスが口論を続けている。

確かに……すげえ、普通なら説明不能だけど……でも、何となくわかった気がする。

そう、これが 魔法というものだ。

「アイリス、それが魔法ってヤツか?」

「ええ、北欧神話系の術式よ。これが私の本命　スウェーデン王家のご先祖様の召喚」

「……すごいな、大した魔法少女だよ　アイリスは」

「莫迦^{ばか}ね、褒めるのは勝つてからにしないさ」

そうだな、まずは沢那に勝たないと　アイリスはここから帰る事が出来ない。

ていうか、俺も沢那って化け物と戦うんだ。沢那と戦うだけでもただじゃ済まされない可能性が高いというのに、勝ったとしても学園から罰を受ける事になるだろうな。

まっ、イザという時は　こんな学園やめてやるさ。

「ナメてんじゃねえよテメエら……私が五本指の一人だって事忘れてんのか!？」

一言、その声が聞こえただけで　全身が震え始めた。
俺は咄嗟に最も精度の高い右手を構えると、次の瞬間　それは来た。

ゴバア！　という結晶の雨。

沢那魅咲という女を中心に、黄色い結晶が四方八方へ襲いかかる。輝くように黄色い巨大な結晶が放たれるだけで、周囲に異様な臭いが漂った。まるで、腐った卵のような、形の整った美麗に輝く物体とは正反対の、鼻を摘みたくするような刺激臭である。

無数に放たれた黄色い結晶は、俺達に容赦なく襲いかかる。俺は右手を突き出し、黄色い結晶に触れるだけで身を守る。バギン！と碎けるような音が響き、結晶は七色に砕け散った。

やっぱり、あの結晶は何らかの物質。そしてこの異様な臭いの正体は……。

「斜方硫黄か……ッ！」

「そつ、特大のね。たかが硫黄でも高速で刺されば人体は貫けるよ？ 高所からスプーンを落として頭に当たったら死ぬのと同じ原理だけど、猿に理解できるカナア？」

これが佐井学園五本指、第四位の實力……多分、その気になれば硫黄以外にも、放射性物質だの一酸化炭素だの、大量に喰らえば危険な物質を作り出せるんだろ。それだけじゃない、一瞬で斜方硫黄を作れたということは 何らかの形で加熱や冷却が出来るんだ、あの女は。

そうだ、そういえばアイリスは。アイツも斜方硫黄の雨を受けたハズだ。

「アイリス！」

振り返ると、アイリスの前に立っていたのは 剣を構えたユングヴィであった。

「アイリスは大丈夫よ、さあ……目の前のクソツタレを倒しましよ
う」

「……ああ！」

よかった、アイツが召喚した神様つてのは腕の立つヤツらしい。そもそも、アイリス自身の身体能力もそこそ高いからな。2人で向かえば沢那に勝てるかもしれない。

俺は再び、アイリスと共に　五本指の化け物を睨みつけた。

「あぁん？　なによ、私とやるおつての？　マジかよ……うつせえ格下共だなぁ！」

ヒュルヒュル！　と、今度は黒褐色のウネウネした何かが放たれる。それも腐敗した卵のような臭いがしたことから、おそらくアレはゴム状硫黄だと思われる。どうやら、沢那は原子操作^{アトムハウンド}”で硫黄を作り出すのが好きみたいだな。さつきからホント、硫黄ばかりだよ。

「邪魔だ！」

薙ぎ払うように右腕を振り、一瞬だがゴム状硫黄に触れる事が出来た。既に能力を発動させる為の計算は終わっていたので、触れただけでゴム状硫黄は砂のように消え去った。

ダン！　と俺は前へ踏み込む。

一瞬で沢那の懐へ潜り込み、拳を叩き込むという戦略だ。

「おっせええ！」

しかし、全力を籠めて放った拳は空振りに終わってしまった。ヒラリ、と、沢那は俺の拳をダンスを踊っているかのような、軽々しいステップで避け　俺の視界から消えたのだ。

次の瞬間、意識を吹き飛ばすような衝撃が　俺の鳩尾に襲いかかってきた。

「ぶ、が……あっ！」

突き刺さるような硬い一撃。

おそらく、俺の鳩尾に突き刺さったのは沢那の膝であろう。激しい痛みと、横隔膜の動きが瞬間的に止まったからか、うまく呼吸困難が出来ない……くそっ、息苦しい。

マジかよ……沢那は 体術もお得意だったのか。さらに俺はぐい、と沢那に胸倉を強くつかまれる。服が首筋に食いこんで痛いし、蹴りを打ち込まれた所も痛ければ、コイツは精神的にも辛い。

ム力つくけど、この状態では口クな抵抗が出来ない。

そんな悔しさが 精神的にとっても辛いのである。

「分かってんのよ、アンタの能力くらい。それを理解した上でこっちは攻撃してるんだよ。悪いけど私は能力に浮かれてるクソ共と違ってね、一応体も鍛えてんのよ。つまりねえ、テメエのような喧嘩慣れした程度の男なんざ 敵じゃねえんだよ！」

流石は五本指、強いのは能力だけじゃなくて……頭もいいみたいだな。そこまで計算して戦っているとは流石に予想していなかった。これはまずいな……どう動く、俺？

五本指と言っても無敵ではない。つまり どこかに隙はあるハズだ。

「昂っ！」

叫び声を上げたのはアイリスであったが、攻撃を仕掛けたきたのは彼女ではなく、彼女が召喚したユングヴィの幻想サモンというものであった。ユングヴィの幻想は、驚くべきスピードで沢那に接近して右手に持つ剣で、首を叩ききるかのような斬撃を放つ。

その気になれば 首を切断出来る一撃だ。

「オカルト野郎は引っ込んでろ！」

沢那が右手を胸倉から離して、未だに胸倉を握る左手にぎゅ、と力を籠めた。一方俺の胸倉から離れた右手を大きく開き、沢那は刃を掴み取るかのような動作をする。

しかし、実際に刃を掴むわけではない。いくら沢那のようなバケモノでも、直に剣に触ればただじゃ済まされないからだ。問題は彼女の有する能力。彼女は自身の能力を使い、ユングヴィの幻想^{サモン}が握る勝利の剣から身を守る為　白銀に輝く盾を作り出した。

カア！　と、閃光を散らすような金属音が響き渡る。

沢那が能力で作った物質が、ユングヴィの幻想^{サモン}による斬撃を防いだのだ。

「あっははははは！　剣じゃタングステン合金は切り裂けねえよ！」

アトムハウンド

原子操作。原子核を構成する核子の個数を操作し、原子そのものを作り変え元素を作り、その原子から様々な物質の構成を行う。それは実質、既存している物質なら何でも彼女の能力で作り出せるというわけだ。今のうちに、タングステン合金を作成したりな。

全く、おそろしい能力だ……一瞬でそんな丈夫な金属を作れるんだからな。

多分、沢那の能力を錬金術師が見たら泣くぞ。

だけど……ソイツには弱点があるな。

「うおおおおおおお！」

「う、この！　クソ野郎オ！」

俺は野獣のように暴れまくる。いくら沢那が強いつて言ってもさ、片腕だけで暴れる男を押さえつけるのは難しいだろう。確かに沢那は腕を離そうとしないし、決して、胸倉を掴まれている状態から解

放されたわけでもない。それでも、体を揺さぶれた前後左右に数センチは動ける。

それを利用して左斜め前へ動き、タイミングよく左腕を伸ばす。一瞬、ほんのわずかな時間だけ、指先がタングステン合金に触れる。

たったそれだけで 彼女のタングステン合金は七色に崩壊した。

「ッ!?」

「お前の原子も所詮は物質。俺の能力は 全ての物質を砕く！」

その言葉を聞いた瞬間、沢那は咄嗟に俺を突き放した。突き放された俺は、バランスを崩してアスファルトに尻餅をついたが、沢那を討つ者は俺だけではない。

アイリスが操るユングヴィが間合いを詰め、文字が刻まれた細剣を振り下ろす。

「だから、剣は効かねえって言うてるだろ！」

沢那がまた原子操作アトムハウンドを使ったのか、またしても白銀の盾が作られる。おそらくさっきと同じタングステン合金を装甲とし、ユングヴィの斬撃を防ごうとしたのだろう。

確かに斬撃は防がれた。金属音が響き、火花を散らす剣の動きは止められた。どんな万能の剣だってタングステン合金は斬れない。あまりにも頑丈な金属だから、剣では斬れないのだ。

しかし、剣術に長けている者は 決して一人だけとは言えない。

「が、あああッ！」

次の瞬間、沢那が苦痛に満ちた悲鳴を上げる。

タンゲステン合金の盾に守られながら、彼女は何らかのダメージを受けたのだ。どうやら痛みは背中から感じているようで、沢那は届かない両手を背中へ伸ばしている。

そう、彼女の背後には 豊穡神の剣を握るアイリスの姿があった。

「て、テメエ！ 私の肌に……肌に、肌に傷をオ！？」

「なによクソツタレ、別にいいじゃない。どうせ傷はすぐに癒えるわよ？」

さて、と……俺は何もしていないし、トドメは俺が刺すでしょう。ゆつくりと立ちあがった俺は力強く、沢那を睨み付ける。沢那はアイリスに気を取られ、俺の行動には気付いていない。

その隙を突いて大地を蹴り、一気に前へと飛び出した。

「こうなったら、テメエらみんな一酸化炭素中毒でブツ殺してやるわ！」

怒り狂って叫ぶ沢那との距離が、ほんの数秒で殆どゼロになる。俺の接近に沢那が気付いたその時にはもう 彼女の懐深くに潜り込んでいた時だ。

自分の骨が碎けるのではないか、というくらい、俺は拳を固く握る締める。狂気と怒りと驚きに満ちていた沢那の顔面を捉え、俺は腕を全力で振るう。

「お。オオおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおッ！」

更に力強く踏み込んで、咆哮と共に顔面を捉える拳を放つ。

ゴン！ と、

俺の右手の拳が、沢那魅咲という女の顔面へと突き刺さった。

少女の華奢な体が勢いよく、アスファルトで固められた地面へ叩きつけられ、乱暴に手足を投げ出しながらゴロゴロと地面を転がる。やがて、沢那はピクリとも動かなくなった。

どうやら 気を失ったみたいである。

どんなに強い人だとしても、数と武器の前には基本的には無力である。沢那魅咲という五本指の第四位もその例外ではなく、俺とアイリス そしてユングヴィの三人は、一人で軍隊と対等に戦えるハズの沢那魅咲を撃破した。数と武器に弱いという基本もあるのかもしれない。

でも、それだけではないと思うんだ。

そもそも、それで倒せるなら、普通は軍隊が勝利するハズである。多分、チームワークと諦めない心が 勝利のカギだったんだと思う。

あの後、俺とアイリスは学園を脱出し、夜のお台場を歩いていた。

「あのクソツタレは回収しなくてもよかったのかしら？」

「ああ、沢那は学園の人間だしな。下手な干渉は争いの激化に繋がるだろ」

「ふふ、それもそうね」

今でも信じられないけど……俺達、あの五本指に勝ったんだよね。だけど、それは俺が学園からの制裁を受けるかもしれないと言う意味だ。

まさか、アイリスの言う特異点狩りが事実だったとは……。それで、俺はそれを妨害した。それはつまり 学園の意思に反する行為だ。

「ねえ、昴。昴はこれからどうするの？」

「ん、考えてなかったな…… 学園に戻ってもシバかれるだろうしなあ。だけど、学校行かないと将来のこともあるし、ああ…… 面倒くさい世の中に生まれちゃったものだよ」

「……ねえ、だったら…… アイリスと一緒に行かない？」

「……え？」

アイリスが顔を真っ赤にしながら、俺を見つめる。
それでも真剣で、断り難いその誘い。
だけど、

「大丈夫よ、隊長にはこう説明するわ 居場所のない人を救いましてね」

「居場所……か」

確かに、今の俺にはアイリスの言う通り 居場所がなくなった。学園の意志に背く行為をしてしまった以上、俺は学園の敵である。従って、あそこに俺の居場所は存在しない。帰っても全力で俺を排除しようとするだろう。

何より帰る気もない。今日一日で 学園の闇を知った気がするからな。

「そうだな、お前の提案に乗るのも 悪くはないかな」

どうせ行き場がないなら、アルファ隊って所に行くのも悪くはないだろう。魔法少女の部隊とは言っていたけど、別に居場所が無いヤツが行く分には 何の問題もないハズだ。

「……えへへ、これからよろしく頼むわね 相棒」

「ああ、よろしくな 親友」

この一晩で俺の人生は随分変わってしまった。いい方向か悪い方向かは別として、俺はこの日から佐井学園の超能力者ではなく、アイリスという少女と仲間となった。

今まで一人であつた彼女の仲間に 。

魔法少女との遭遇は 人生の転換期と言っても過言ではないだろう。

後編 遭遇の結果（後書き）

どうも、作者の作戦参謀です！

短編のハズが、まさかの前後編……おまけに後編は滅茶苦茶長い（汗）

そんな感じで、相変わらず無駄な描写の多いダメ素人作家な自分です。ありますが、如何でしたでしょうか？

北野とアイリスはいずれ、「魔法少女に会っちゃった場合」本編でも活躍させたいなと思っております。

それではこのへんで、筆を置かせていただきます。

ご視聴、ありがとうございました！

以下、登場人物の大まかな設定です。

登場人物

きたのすばる
・北野昂

本作の主人公。佐井学園の生徒で超能力者。

性欲にまみれ、欲望に忠実に生きる年頃な少年で、エロ本の新鮮さを求めて行動中にアイリスと遭遇する。

開発科在籍の生徒らしく、物質崩壊という超能力を使える。
マスターカラーブス

A→Eランクの中ではCランクに位置し、強力な能力を持ちながら、触れないと物質の操作が行えず、その上ある一定の物質質量を超える
と処理しきれず、自身もダメージを受けてしまう。

能力的にはBランク認定されてもいいものの、上記のような欠点からCランク止まりである。

わりと冷静な性格ながら、時には本気を出す熱い男にもなれる。
成績は良好な様子。好きな物は女の子とムフフ。アイリスにえっち

と呼ばれる。

ちなみに恋愛に関しては鈍感だ。

沢那戦後、居場所を失いアイリスと共に行動することを決意した。

・アイリス・オースティン

本作のヒロイン、昴が公園で出会った魔法少女。

厨二病的な行動と、アメリカ人の下品なスラングを多用する言葉使いの荒い少女だが、見た目はロリ可愛い。

それでもアルファ隊の特隊員らしい。東京にいた理由はサヴィエトによる首相官邸襲撃を阻止する為。

北欧神話系の術式を扱い、豊穡神の剣の劣化コピーや、鹿の角などフレイに関する武器を生み出す術式を使う。

しかし、それは本気ではなく、本命の魔法は『ユングヴィの幻想』サモンという、北欧神話のユングヴィことフレイを召喚し、操る召喚魔法を得意とする。

元々はこっちの世界の人間だったらしいが、あまりに強力すぎる召喚魔法を覚えていた為、一家ごと教会に迫害され、行き場を失っていた所レムリアに辿りつく。

その後、魔法使いとして生きる為に訓練し、アルファ隊の一員として戦うことになる。

昴との出会い、一連の騒動を解決した後彼を誘い、共に行動する事を決意する。

・マウリッツ・エンゲルンド

サヴィエトの魔法使い。首相官邸襲撃の為に東京を訪れていた。

堅い口調の男。ミスティルティンというヤドリギで作った槍を用いてアイリスに挑む。

ミスティルティンの特性を用いた魔術を行使し、アイリスの剣を砕

いたが、昂の物質崩壊で槍を破壊され、殴り倒されてしまった。
その後、アルファ隊に回収されたようである。

・沢那魅咲 さわなみさき

佐井学園に通うAランク超能力者、五本指の一人であり序列第4位。
何らかの組織のリーダーらしく、有する能力は「アトムハウンド原子操作」。
普段はそうでもないものの、非常に我がまなお嬢様で、自分の思
い通りに物事を進める為なら手段を選ばない。

扱いやすいという理由で、「硫黄」を原子操作で生成し、様々な形
状に変化させながら戦う。

また硫黄を変化させる為に分子運動の操作が行えるらしく、その為
加熱も冷却も自由自在らしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8741x/>

魔法少女と遭遇してしまった場合

2011年11月11日04時18分発行